

第九問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

① 科学の世界は、いうまでもなく、すみからすみまでが合理的なものであり、わずかも神秘的なものや異常なものなど、はいりこむ余地はない。科学は、あきらかに、妖怪変化の敵であり対立物なのである。そして、この論法からいけば、空想科学小説は、怪談のたぐいとは、はっきり区別されなければならないことになる。

② △が、科学を、異常や非合理と、それほど機械的に対立させてしまつて、いいものだろうか。科学の世界を、なんのナゾも陰影もない、単なる数のサバクのように考える考え方は、科学と魔術との区別ができなかった、中世的思考の裏返しにしかすぎないのではあるまいか。中世の科学観は、地獄の炎にも似た、暗いドロドロした奇怪さでいろどられていた。そして、△方、現代の科学観は、あまりにも無味乾燥な、灰色の虚無にいろどられているというにすぎないのだ。いずれにしても、現実には科学がはたしている役割とは、おおよそ無縁なものだといわなければなるまい。

③ 科学は、異常な世界に対する挑戦ではあつても、絶縁ではない。挑戦は、敵のふところにもぐりこまなければ、成り立たないが、絶縁は、敵から顔をそむけて、ドアを閉めてしまえば、それですむ。実際に、科学と対立しているのは、異常世

〔出典〕
安部公房
『あべこげ』

〔仮説の文学〕

〔著者出題歴〕

- ・東京大学
- ・横浜市立大学
- ・金沢大学
- ・大阪府立大学
- ・山口大学
- ・早稲田大学
- ・上智大学
- ・青山学院大学
- ・南山大学

第九問

④ 日常性の秩序にたいする信仰は、異常性を二重の意味で、キヨヒシし敵視する。一つには、それが総そらであり、不真面目であるという点で、いま一つは、より積極的に、日常の破壊者であるという理由によつてである。日常性は、単に守られるべきだけでなく、シンセイなものであり、モラルを支える土台石だというわけだろう。そしてこの異常性に対する攻撃は、しばしばそっくり、科学精神にも向けられたことを忘れてはならない。秩序の名において、魔女も科学者も、同じ炎で焼き殺されてきたのだ。日常という神話からみれば、秩序の破壊者という点で、ブルーノもサドも、変りがなかったのである。

⑤ たしかに、日常という座標をとおしてみると、本来は対立物であるはずの科学と妖怪の世界が、機能においては意外に共通性をもっていることに気づくのだ。どうやら、日常世界というやつは、科学の世界よりは異常に近く、妖怪の世界よりは正常に近いという、はなはだヌエ的な存在で、そうしたヌエ的秩序ではもはや包みきれなくなった、現実のエネルギーが、本能的にあらわれた場合、それが妖怪の世界になり、知的にあらわれた場合に、科学の世界になるのではあるまいか。この一見矛盾しあつた、二つの世界は、互いに打ち消し合う関係にあるというよりは、むしろ弁証法的に支え合いながら、日常の破壊者の役割をはたしてい

問三 傍線部1で、筆者は「科学」を「異常や非合理」と「機械的に対立」させてしま
う考え方に疑問を呈しているが、その論拠として最も適当なものを、次の中から
一つ選び、記号で答えよ。

C	B	A

問二 二重傍線部A～Cの「それ」が指示する語句を、それぞれ本文中から抜き出して
記せ。

問一 傍線部a～eのカタカナを漢字に改めよ。

a b c d e

(注) ○ブルーノ……一六世紀イタリア・ルネサンスの哲学者。
○サド……一八世紀のフランスの作家。
○ヌエ……鶴。伝統上の怪獣。頭は猿、手足は虎、体は狸、尾は蛇、声はトラツグミに
似ているとされる。転じて、正体のはっきりしないもののこと。

5

るらしいのだ。

⑥ こう考えて来てみると、空想科学小説もまた、怪談との相違点よりは共通性の
ほうが目立っても一向に差しつかえないことになる。最近の空想科学小説の傾向
について、ある文芸評論家は、それがあまりにも疑似科学的であり、怪談的で
あると非難していたが、私は一向に、それが否定の理由になるとは考えない。私
のイメージの中にある、空想科学小説は、べつに科学技術の発達にともなって生
れた、通俗科学啓発小説のたぐいなどではなく、むしろギリシャの古典文学、た
えばルキアノスの『本当の話』などから、すでに脈々としてつづいている、仮
説の文学伝統、『ガリヴァー旅行記』『ドン・キホーテ』『西遊記』等々と枚挙にい
とまもない、大きな文学の流れの、一つのあらわれにほかならないのだ。仮説を
設定することによって、日常のもつ安定の仮面をはぎとり、現実をあたらしい
シヨウメイでてらし出す。インギヤと挑戦の文学伝統の、今日的表現にほかな
らないのである。

⑦ 見方によれば、この仮説の文学の伝統は、自然主義文学などよりは、はるかに
大きな文学の本流であり、コンゲン的なものであり、空想科学小説の興隆も（そ
ういう現象があると仮定して）単なる風俗的現象以上の、なにか本質的な意味を
もっているのではあるまいか。それは、人間の宇宙飛行の反映というよりも、む
しろ崩壊しつつある、この日常の秩序の反映であるように思われてならないのだ。

35

B

C

イ 科学の世界は、なんのナゾも陰影もない、単なる数のサバクのようなものであるから。

ロ 現代の科学観は、あまりにも無味乾燥な、灰色の虚無にいろどられているというにすぎないから。

ハ 科学の世界は、そのすみずみまでが合理的なものであり、神秘的なものや異常なものなどはいりこみ余地はないから。

ニ 日常の秩序を重視する保守的感情と対立する点で、科学も異常な世界も共通しているから。

ホ 現代の科学もまた、中世のそれと同様に、地獄の炎にも似た、暗いドロドロした奇怪さでいろどられているから。

問四 傍線部2「魔女も科学者も、同じ炎で焼き殺されてきた」とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

イ 日常的な秩序を逸脱した現実のエネルギーのあらわれを、日常の破壊者であるという理由で攻撃してきたということ。

ロ 現実のエネルギーの本能的あらわれである世界を、現実のエネルギーの知的なあらわれによつて攻撃してきたということ。

ハ 科学の世界も魔女の世界も、日常世界よりも異常な方向に逸脱している点で同じだという理由で攻撃してきたということ。

ニ 不真面目な日常の破壊者である世界を、本能的な世界と知的な世界との対決を

防ぐため攻撃してきたということ。

ホ 現実から逸脱し秩序を破壊しかねないエネルギーのあらわれを、本能的の欠如や知性の欠如を理由に攻撃してきたということ。

問五 筆者の主張と合致するものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

イ 日常性はモラルを支える土台であり、科学技術はつねにその土台のうえに合理的に組み立てられてきた。

ロ 日常の安定した世界を維持してゆくためには、科学や異常の世界の持つ反日常性を克服してゆかねばならない。

ハ 科学と異常は、かつては対立していたため秩序を支える結果となったが、今後は協力して秩序の破壊を目指すべきである。

ニ 空想科学小説は、非日常的な世界を示すことで、現実の秩序を新たな角度から見つめなおさせるという働きをもっている。

ホ 日常の秩序の破壊性を持つ空想科学小説の隆盛が、現実の秩序の崩壊を招来したのであるといえよう。